
金音《こがね》

エール・クリストファ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こがね
金音

【Nコード】

N3490V

【作者名】

エール・クリストファ

【あらすじ】

天才美青年「天音」と、絶世美少女「金音」。

二人に引き込まれ、翻弄されていく人々。

こんな美しい人が現実存在していたら、

世の中どうなっちゃうの？を楽しく妄想しながら書いています。

なので美しい人ばかりが登場します。

シリアスにエロいシーンが多いです。

ファンタジーと言いながら、転生・召喚はありません。

そんなお話ですが、よろしかったら是非、読んでいって下さい。

扉を開ける者

古来より世界を統べる天の一族が
日本という小さな島国に
今も強大な力を保持したまま
系統を引き継いでいる

その存在は各界の上層部が知るのみ

一族は高い知能と鋭敏な六感を持ち
人を超えた采配で まさに神のごとく
世界を裏から動かしてきた

そんな彼らの頂点たる「長・天音」は
その靈感を増幅させる存在「金音」を常に傍らに控えていた

金音は龍の一族から50年に一度出現する
至高の美貌を持つ少女
その美しさと、男に靈感を与える特性から
常に欲望の対象となってきた

そのため、天音は彼女を人目から
隠すようになった

そうして金音は噂のみで知ることのできる
伝説の存在となっていた

「籠女さま。花瓶はそちらのテーブルへ置いてくださいませ」

教育係の月村が、いつものようにキビキビした物言いで指示をする。

籠女は物心つく前から、年齢も素性も知らないこの月村という中年女性と、

ほとんど二人きりの生活だった。

月村はいつも白いブラウスに黒いロングスカート姿で、眼鏡の奥の冷ややかにつり上がった眼で静かに籠女を見下ろす。

そこには相手に抵抗する隙を与えない緊張感が常にあった。

しかしだからといって籠女に対して冷たいわけではなく、常に一定の距離を保ちつつも、籠女にとっての最善を尽くす気遣いがあった。

そのせいか籠女は文句を言うことなく、黙って月村の言うことに従ってきた。

ほっそりとした月村の背後にそびえる大きな扉。

籠女はその向こうの景色を知らない。

この屋敷から一步も外に出たことがないのだ。

成長するにつれ、自分は軟禁されているのではないかと考えるようになった。

しかし扉の外に対する漠然とした恐怖感があって、逃げ出そうとは

思わなかった。

屋敷の中は広く、広大な庭もあり、月村の授業も毎日あったから、穏やかに日々を過ごすことはできていた。

扉は自分が出ていくものではなく、

時折、一人の老人が籠女に会いにやって来るための入り口だった。

「今日はお祖父様来る日なんですか？」

老人がやって来る日は必ず玄関を花で飾るのだった。

月村のことと同じく、その老人についても何も教えられていなかったのだ、

自分の祖父なのかさえ分からなかったが、

いつも優しい眼で見つめてくる老人の顔を、

籠女は親しみをもって思い起こしていた。

すると月村がめずらしく表情を動かし、複雑な顔をした。

「今日のお客様は違つかたです」

籠女は今まで聞いたことのなかった回答にぎよつとした。

物心つく前から同じように繰り返してきた日常。

それが突然変わってしまうような、不安と恐怖がおそってきた。

ただ、今までと違う人があの扉からやってくる。それだけのことなのに、

月村が一瞬見せた複雑な表情に、ただごとでない何かを感じた。

「では籠女さま、温室からバラを摘んでここに飾って下さいませ。
私はお客様をお迎えする準備をして参ります」

籠女には、誰がとか、なぜとかと聞き返す勇氣はなかった。

「どんなバラを選んだらいいかしら？」

辛うじてそれだけ聞くと、月村が口を開くまでの間、
心臓が止まるかもしれないくらいの緊張が走った。

「籠女さまが選んだものであれば何でも喜ばれると思います」

月村はそれだけ答えると、

逃げるように素早く屋敷の奥へ姿を消してしまった。

やはり、何かが起こる…

今日までの日常を壊す何か

胸の奥から突き上げてくる恐怖感に、追いたてられるように、
籠女は温室へ走り出していった。

バラの温室は、本を読んだり絵を描いたりする籠女のお気に入りの
場所だったが、
今日はとてもいつものようにはリラックスできなかった。

怖い… 一体何が起こるのだろうか

心を落ち着かせる香りを求めて、足は温室の中をさまよった。

一番気に入っている白いバラへ手を伸ばした時、背後から声が降ってきた。

「君はいつも素手でバラを摘むのか」

初めて耳にする声に、籠女の手が凍りつく。

それは美しく透き通った声で、目の前の白いバラが発したような錯覚に捕らわれた。

声の主は静かに背後へ歩み寄り、背を向けたままの籠女の手にそつと触れた。

「君の細胞には常人の数十倍の自浄力があるから、傷はすぐに消えるだろう。」

それでもその白く美しい肌が傷つくところを見たくない」

冷たく長い指が、籠女の手から腕を静かになぞり、その感触に籠女はゾクリとした。

すると急に長い指に力が入り、籠女の腕をつかんで引き寄せると、冷たい唇が手に触れた。

「今日から君は僕のものだ」

少しかすれたその声に、籠女が顔を上げると、金色に輝く瞳があっ

た。

静かな声とは裏腹に、熱く情熱的に燃え上がる瞳。

それを見た途端、籠女の意識はふっと遠退いていった。

ぼんやりとした意識の中、

籠女は小さな子供の頃の記憶を辿っていた。

温室でいつものように一人遊びをしていた時、
突然現れた金色の瞳のピーターパン。

「一緒に外へ行こうよ！」

キラキラと輝く美しい少年の顔。

でも勇気のない私はその手を振り払い、逃げ出してしまった。

たった一度の出来事。もしかしてあれは夢だったのかもしれない。
でもその記憶は小さな痛みを伴い、バラの刺のように今でも心に刺さったまま。

ゆっくり瞼を開けると、目の前に穏やかに輝く金色の瞳があった。
籠女はいつのまにか自分のベッドに横たわり、青年はその横に腰か

けていた。

青年は10代に見えた。

まるで神話に登場する若き美神のように整った顔立ちで、スラリとした肢体には崇高な空気を漂わせていた。

窓から流れ込む風に青年の柔らかい髪がゆるやかに揺れるのを、籠女はうつとり眺めた。

青年は長い指で彼女の白い頬に触れた。

「君は子供の頃から敗者の瞳をしていた。それが僕には許せない」

そう言うと、長いまつげを伏せて、籠女に顔を近付けた。

青年の柔らかい髪が額に触れ、冷たい唇が唇に触れた。

心地よい感触に、籠女は思わず大きく息を吐いた。

「君と僕は大きな運命を背負って生まれ落ちてきた。

でもだからと言って今までの『長』のように、

僕は君を閉じ込めることはしない。」

再び唇を寄せると、青年の体温が少しだけ熱くなってきたのが感じられた。

彼は両手で籠女の頬をそっと包み込み、金色の瞳を熱くうるませた。

「運命なんてと思っていたけれど、君と繋がってられるなら悪くないな」

青年は優しく微笑んで言葉を続ける。

「『籠女』は君の幼少名で、今日からは『金音』という名になる。そして僕の名前は『天音』だ。

これから君はここを出て、僕と一緒に別の屋敷で生活するんだ。まずはそこでゆっくり僕たちのことを教えてあげるよ。全てを知った後どうするかは、君が自分で考えて決めればいい」

そこまで言うつと青年は籠女の頬から手を離し、スラリと立ち上がって笑みを消した。

「火村！悪いが嫌でも今日から君には金音の護衛についてもらうよ」

天音の声に、ドアの向こうの気配が一瞬ひるんだ。

「私の護衛には虎をつけて、今日からお前は金音の護衛に回れ」

ドアの向こうから黒い影がゆらりと姿を現した。

黒いスーツに身を包んではいたが、精悍な顔つきと厳しく光る漆黒の瞳、

そしてがっしりとした大きな体はまさに古代の若き軍神だった。

「承知いたしました。それでは同じ火村である虎との区別のため、今日から私のことは『獅子』とお呼びください」

暗く輝く獅子の瞳が籠女を捉えた。

感情の見えない眼は、月村も同じだった。

でもその裏に月村にはなかった情熱を感じて、籠女は怖かった。

火村の一族は古代から天音を護る役目にあつた。身体能力の高い一族の中で、特に優秀な若者が選ばれて天音の護衛につく。

獅子の幼少名は『勝』。

勝は生まれつき体が大きく運動能力にも秀でていたため、幼いうちからその頭角を現し、1000年に一人の逸材ともてはやされた。

勝が15歳の年、火村の長である『獅子』名を継ぐことが決まり、同時に天音の護衛としての正式な教育が始まった。

天音の一族の歴史、しきたり、各界との繋がりや敵対関係について徹底的に叩き込まれた。

その中で唯一、先代の獅子から直接指導を受けたのが『金音』に關することだった。

通常、天音の護衛は50歳で身を引くこととなっていたが、天音の代替わりと勝の成長に合わせるため、この時の獅子はすでに55歳になっていた。

火村家の道場で勝と向かい合つて座つた獅子は、穏やかに笑みを浮かべた。

「この度、天音さまとなられた若者は、1000年に一人と言われ

るほど優秀な御方だ。

その存在に導かれるように火村の中でも同じく

1000年に一人と言われる逸材のお前が育った。

私は運命を感じずにはいられないのだ。」

「恐れいます」

先代の獅子の武勇を数多く伝え聞いていた勝は、深々と頭を下げた。

「本来であれば、次代の獅子の教育が必要であつても

私が天音さまから離れることはない。しかしこれだけは別なのだ」

勝が顔を上げると、先程とは違う厳しい表情の獅子がいた。

「お前は『金音』について耳にしたことがあるか？」

「はい。天音様のみが手にすることができると秘宝と伝え聞いております」

「秘宝…そうだな。確かにそれは正しい。

しかし『金音』が実際にどんなものなのかは誰も知らない。」

「黄金の宝なのかと思っております」

「うむ。『金音』については天音さまのごくごく側近のみ知ることが許される。

その一人が獅子だ。今日は次代の獅子であるお前に『金音』を伝えるために

天音さまから特別にお時間を頂いた」

勝に緊張が走り、握った両手の拳の奥にじんわりと汗が湧き出た。

獅子は声色を変えず、淡々と続けた。

「『金音』は女の形をしている。

この世の理想を全て叶えたような、絶世の美貌を持つ女だ。
50年に一度、龍の一族に出現する。

そして『金音』を見た男は例外なく魂を奪われる。

他の女が目に入らないほど夢中になってしまふのだ。」

そこまで言って50を越えた獅子は大きくため息をついた。

「私の前の代の獅子は伝説など笑い飛ばすような豪快な男だった。

しかし『金音』を一目見た時から心を支配されてしまった。

獅子としての仕事は最期までやり遂げたが、子を成すことはせず、
死の床で熱にうかされながら呟いた言葉は『金音』だった。

生涯、『金音』への思慕を胸に抱き、そこから逃れることができなかったのだ。」

先々代の獅子の豪快な人柄は火村の一族の中で有名な話だった。

そして多くの女を袖にしたことでも有名だった。

あれだけの人格者でありながら、女との付き合いは遊び止まりだったことを、

誰もが不思議に思っていた。それが『金音』への思慕のせいだったとは…

獅子は瞳を厳しく光らせ、勝を見つめた。

「そのことがあって、先々代の天音さまは『金音』を人目から隠した。

それは今も続いている。

私は『金音』を見ずにすんだ。

おかげで妻を持ち、家庭を持ち、多くの子供にも恵まれた。

お前も出来るなら『金音』を見ることなく、使命を全うしろ。そうすれば人としてまっとうな人生を送れるだろう。

しかし…」

獅子の表情に不安がよぎる。

「新たな天音さまは利発ゆえに、『金音』をどう扱うのかが分からない。

今は先代の天音さまが『金音』を保護しているが、お前も知っているように先代は若い頃から続く病のため、残りのお命はあと数年だ。そうなった時…」

獅子の言葉が途切れた。

その沈黙に勝はゾクリと身を震わせた。

『獅子』という運命には、守護の役目以外の何かがあるというのか…

生まれてからずっと、天音さまに仕え、お守りすることを使命と考
え、

何の迷いも生じなかった。

自分の心を惑わすものなどあるはずがないと考えていた。

しかし『天音さま』という光の側に仕え、その生涯に寄り添うことで、心をゆさぶるほどの存在に出会ってしまうのかもしれない。

「それでも…」

勝は無意識に声に出していた。

「私は使命を全うするのみです」

勝のひたむきな瞳を見て、獅子は頷き肩を優しく叩いた。

「頼んだよ」

あれから3年。

先代の天音がこの世を去り、とうとうその時が訪れた。

「この扉の向こうにいるのが『金音』だ。

お前は僕が呼ぶまでここで控えていてくれ」

天音にそう言われ、獅子に緊張が走った。

それに気付いた天音が言葉を重ねた。

「火村。ぼくは先代と同じようなことはしないよ。君なら分かるよね」

天音に仕えて3年。

獅子はその才覚に心からの忠誠心を抱いていた。

「御意にございます」

何があるうとも、私のこの心は変わらない。

しかし、少しして部屋から投げ掛けられた天音の言葉で、運命は動き出す。

「火村！悪いが嫌でも今日から君には金音の護衛についてもらうよ」

獅子の全身に冷たい緊張が駆け巡る。

ゆつくりと部屋に足を踏み入れ、視線を上げると、そこに『金音』がいた。

触れた途端に壊れてしまいそうなほど、華奢で儚げな肢体。

真珠のように光を放つ滑らかな白い肌。

栗色の髪はゆるやかなカーブを描いて腰の辺りまでの長さがあり、細い肩と胸元を艶かしく伝い落ちている。

天使のように可憐な顔立ちの中の大きな瞳は、長い睫毛の下で頼りなく揺れている。

視線が合うとピンク色の果実のような唇が震え、それを見た途端、獅子の全身に生まれて初めて感じる炎がほとばしった。

まずい…これは…

その後、何事もなかったように天音の指示に従ったが、頭の中は体内を荒れ狂う熱を抑え込むので必死だった。

天音もまた、金音へと流れ出す心に戸惑いを感じていた。

予想はしていたけれど、ここまでとは…

これではすっかり油断すると魂を丸ごと奪われかねない。

金音との生活のために用意された屋敷へ向かう車の中、隣には金音が座っていた。

幼い頃に彼女の隠された屋敷へ忍び込み、

一目会った時から、ずっと夢に見てきた少女だ。

その少女が手に入った喜びと、

運命の相手と知りながらそれでも尚、ざわめく心に、心は二分されていた。

だからといって監禁などという愚かなことは決してしない。

ではどうするのか…

金音に会ってから冷静に考えるつもりだったが…

「金音」

窓の外の流れる景色を不安げに見つめていた金音は、不意に発せられた声にビクリとする。

振り向くと天音が熱っぽい瞳でこちらを覗き込んでいた。

「君の声が聞きたい。何かしゃべってくれないかな？
僕に聞きたいこと、何かない？」

天音の懇願するような声に戸惑いながら、
金音は少し考え、口を開けた。

「あなた、誰？わたし、どうなるの？
月村は？お祖父様は？」

口に出した途端、不安が否応なく膨らみ、金音の心に重くのしかかる。

思わず涙がこみ上げ瞳からこぼれ落ちそうになると、
天音がハッとして金音の細い手に指を伸ばした。

「ごめん。不安だよ。大丈夫だよ、ゆっくり話をするから」

そつと唇で金音の手の甲に触れると、ふわりと花の甘い香りがした。
思わず柔らかい頬へも手を伸ばして額に唇を寄せると、更に甘い香りが濃くなる。

先へ先へと進みたくなる心を抑え、天音は手を離れた。

「嫌じゃない？」

聞かれて金音は頬を赤らめた。

「わたし…あなたに会ったことがあるような気がして」

天音は衝動を押さえきれなくなり、金音の体を抱き寄せた。
金音は熱い腕の中、顔を上げて金色の瞳を見つめた。

「やっぱり、あなたはあの時のピーターパン…」

言いながら手を伸ばし、頬に触れると、天音が一瞬体を震わせた。
そして覆い被さるように額を近づけ、唇に唇を重ねる。

それは今までとは違う、深く深く求めてくる口付けで、
金音はその熱さに思わず口を開いた。
すると更に熱いものが口の中に流れ込んできた。

熱は痺れを伴い、全身を麻痺させ、金音は気を失いそうになった。
天音はそれに気付き、あわてて体を引き離れた。

「ごめん。大丈夫？」

我に返った金音は、真っ赤になって両手で顔を覆った。

「だって…。気持ちよくて…」

金音が小さく漏らした言葉に、天音も顔を真っ赤にした。

なんだこれは…

自分を受け入れてくれていることの喜びと、

赤子のように純粋な少女を壊してしまいそうな荒れ狂う情熱。

天音は初めて体感するそれらを、どう処理していいかがわからず、仕方なく窓の外へ視線を外した。

こんなこと初めてだ…

そのまま屋敷に到着するまで、車内は沈黙が続いた。

覚醒

「虎が天音さまに召されただと？」

「どういつことだ？」

「獅子に何かあったのか？」

「獅子は『金音』の護衛を命じられた」

「『金音』だと？」

「『金音』とは何だ？」

「『金音』が出現したとは本当か？」

「天音さまが『金音』をお側に召されるといふのは本当か？」

「『金音』の出現だと？恐ろしい！」

「『金音』を眼にした者は正気を失うことになるぞ」

「決して『金音』を眼にするな」

「近付くな」

「恐ろしい……」

都庁と並ぶ高層ビルの地下駐車場へ、黒い外交官ナンバーの車が滑り込む。

直後に地下の一角の壁が突然パクリと口を開け、その車を飲み込んだ。

壁の向こうには長い通路があり、そのまま車を走らせて行くとやがて広い玄関にたどり着いた。

運転席から獅子が降り、素早く後部座席のドアを開ける。

「金音、着いたよ。おいで」

差し出された天音の綺麗な手につかまり、金音は恐る恐る車から降りた。

天井の高い黒大理石の玄関には、背の高い青年が一人立っていた。

15か16くらいにしか見えなかったが、

秀でた額の下、鋭い獣のような瞳は、獅子によく似ていた。

「虎でございます。お待ちしておりました」

天音は小さく頷いた。

その横で金音は、虎の視線が天音から獅子へ移り、やがて自分のところでピタリと止まるのを感じて、身を固くする。

思わず天音の腕に手をかけると、彼がその手を強く握り返した。

「虎。金音はまだ人慣れしていない。あまり見るな」

冷たく低い声が響く。

「失礼いたしました」

言いながら視線を引き剥がすように深々と一礼をして、虎は玄関へ向き直り、扉を開いた。

「金音、屋敷という言い方をしたけれど、僕らが住むのはこのビルの40〜50階だ。

立ち入るのは僕が許したごくわずかな人間だけ。

上がったら皆を紹介するよ。さあ行こう」

金色の大きなエレベーターの扉が開き、天音に手を引かれて金音が乗り込む。

そして二人をガードする形で獅子と虎が乗り込み、扉は閉まる。

「僕は金音とそう変わらない年齢だけど、一族を任され、財産の運用をしている。

一日のほとんどをこのビルのオフィスで過ごしているんだ。

海外へ飛ぶことも少くない。

だから君とずっと一緒にいられる訳ではないんだ。」

その言葉にみるみる不安が膨れ上がり、金音は更に強く天音の腕をつかんだ。

「でも君が自分の状況を理解できるようになるまでは、ずっと一緒

にいるつもりだよ。
それは約束する」

自分の状況…

それを理解できたとして、その時になればこの不安が消えるのだろ
うか…

分からない…

私はまだ自分自身が何者かさえ分からない。

ただひとつ、分かっているのは、
今横に立つ天音がその答えを全て持っているということだけだ。

ポンという軽い音と共にエレベーターが止まり、扉が開く。
そこには緑の大理石で造られた広い玄関があった。

扉の前にはまた一人、背の高い青年が立っていた。
今度は獅子や虎とは違う、天音よりも更に細い印象の青年だった。

特に特徴的なのが腰までの長さがある銀色の髪。
そしてまるで氷河の欠片のようなアイスブルーの瞳。
緑の大理石を前に静かに佇むその姿は、まるで妖精のような美しさ
だった。

「お帰りなさいませ。お待ちしておりました」

金音は彼の涼やかな顔立ちに、なぜか見覚えがあるような気がした。

「金音。彼は月村美影。君の教育係だった月村の甥だよ」

ああ、だから…

ハツとする金音に、美影は優しく微笑みかけた。

「叔母からお話はよく伺っています。

今日からは私が金音さまのお世話をさせて頂きますので、
どうぞよろしくお願い致します」

深々と一礼する姿は、柔らかに優雅だった。

しかし金音は戸惑いを隠せなかった。

するとそれに気付いた美影が、言葉を足した。

「ご安心くださいませ。天音さまが『彼』と呼ばれましたが、
私はインターセクシャル。つまり男でも女でもありません」

しかし金音はその言葉の意味が理解できなかった。

そんな金音に、美影は更に優しく言葉を足した。

「月村の一族は古来から私のような者を多く生み出す血筋でした。
それが珍重され、長きに渡り金音さまのお世話を任されてきたので
す」

すると天音も言葉を重ねた。

「加えてこの美影は盲目だ。
目の見えない者はその分、他の感覚が鋭敏で、真実を捉えること
に長けている。」

そして月村の一族は古来から金音のことを最もよく知る者たちだ。
安心して側における」

「恐れ入ります」

美影は優雅に頭を垂れた。

その動きには寸分たりとも隙がなく、とても盲目とは思えなかった。

「では、獅子と虎にはここに控えて頂いて、先は私がご案内いたしまし
しょう。」

金音さまは突然のことでお疲れでしょうから少し休息を。

雨音さまもその間、お待ち下さいませ」

金音さま、金音さま…

なんと美しい。

盲目であっても感じられる。

取り囲む空気の甘やかさ、佇む気配のたおやかさ。

押さえても押さえても、愛しい思いが胸の奥から沸き上がってくる。

美影は燃える思いを振り払い、手早く金音のための絹を選んだ。

「金音さま。まずは湯あみで疲れをお取りしましょう」

それは教育係だった月村も、よく口にした言葉だった。絹を持つ美影の姿も、月村のそれとよく似ていて、金音の心に安堵の色が広がる。

案内された浴室には、見覚えのある広い湯船と、いつものバラの香り。

金音の緊張はみるみる解けていった。

美影は素早くローブを脱ぎ、薄絹を一枚羽織っただけの姿になった。

それは確かに青年の形ではあったけれど、あまりに繊細で美しく、異性に対するような警戒心を金音に与えることはなかった。

むしろ、湯気の向こうに見える美しい妖精のような姿に、金音はうっとり見とれていた。

美影の細い指が動き、衣服がふわりと金音の足下に落ち、やがて真珠色の肌全てが露になった。

美影は湯船の湯を桶ですくい、真珠の肌にかけて後、金音をベッドへ導いた。

「金音さまがお好きなオイルでマッサージをさせていただきます」

金音は抵抗することなく、ベッドにうつ伏せになった。

オイルで滑らかになった美影の手が背中をゆっくりと伝う。その感触の心地良さに金音は深く呼吸する。

するとバラのオイルの甘い香りが体の奥底へ入り込み、意識がぼんやりと霞んできた。

「天音さまにお会いになる前に、金音さまの心身を柔らかくほぐすことも、

月村に代々伝わる大切な仕事なのです」

更に霞行く意識の中、美影の声が妖しく響く。

「それでは仰向けになってください」

言う通りにすると、金音はもはや瞼を開けていられなくなった。

瞳を閉じる寸前、美影の気配が急に近付いた気がしたが、確かめることはできなかった。

オイルに濡れる手が、額と頬に柔らかく触れる。

それは首に降り、肩に降り、更に下へと降りてくる。

すると次の瞬間、胸の最も敏感な部分を生温かいものがなぞり、金音はその感触に思わず小さく声を漏らした。

それはゆっくりと腹部へ移動し、更に下へと進み、やがて金音自身ですら知らなかった深い部分へ滑り込む。

初めて知る刺激に、金音の身体はビクリと弾けた。

次の瞬間、それは離れて代わりにオイルの手が、痺れる金音の腹部を緩やかに揉みほぐした。

「金音さま。お支度が整いました」

その声で、金音はハツと我に返った。

目の前には鏡に映る自分がいる。

後ろで美影が、金音の髪を櫛でとかしていた。

「湯から上がった後、金音さまはしばらくお眠りになって…」

今はちょうど夕食のお時間です。天音さまがダイニングでお待ちですよ」

鏡の中の金音は薄いシャンパン色のワンピースを着て、髪も綺麗に整えられている。

眠りに落ちる前に、何かを感じたような気がするけれど、うまく思い出せない…

「さあ、ダイニングへ参りましょう」

記憶をたどる作業は、美影の声で中断させられてしまった。

「やっぱり、食が進まないみたいだね」

夕食のテーブルで、どうしても落ち着くことができないでいる金色の様子に、

天音がため息をついた。

「しっかり体力を付けるためにも、君にはきちんと食事をして欲しいんだけど…」

カチャリとフォークを皿に置き、ナフキンを持って優雅に口元を拭く。

「今日は初日だからね、特別に許してあげるよ」

天音はそう言っていたずらっぽくウィンクすると、立ち上がった。

「さ、好きなデザートだけ持って、僕の部屋へおいで。

美影も入れないから、二人きりになれるよ。気楽にチェスでもしよっか」

後ろに控えていた美影がそっと金音に歩み寄り、

トルコ産の大きなドライいちじくをいくつも乗せた皿を差し出した。

「どうぞ、金音さま」

金音はそれが一番の好物で、今一番食べたいものだったので、あまりにすぐ出てきたことに驚いた。

しかし少し考えてやはりそれを持って、天音の部屋へ行くことを選んだ。

視線を上げると、天音はドアのところでアイスクリームの乗った皿を、給仕から

受け取っているところだった。

「さ、行こう」

言って口笛を吹きながら歩き出す。

金音はあわててその後を追いかけた。

部屋を出るとそこはガラス張りの広いフロアで、眼下には広大な街の夜景が広がっていた。

それを眺めながら、二人はフロア中央の螺旋階段を上っていく。

上りきると今度は窓のない広間となり、長いソファがいくつも並ぶ向こうに、

大きな扉がふたつそびえていた。

その片方が天音の部屋で、もう片方が金音の部屋だった。

「本当は部屋を分ける必要なんてないんだけど…」

言葉の途中で天音はパクリと一口、アイスを口に運んだ。

「君には美影がいるからね。でも君は僕の部屋にいつでも自由に出入りができる。

ずっといたければ、いたっていいんだよ。

美影は僕の指示がない限り、入らないからね…」と、

アイスがとけそうだから、急いで部屋へ行っていていい？」

金音の返事も待たず、天音は長い足ももどかしそうに早足に自室へ飛び込んだ。

そしてお気に入りらしき椅子にどかっと座ると、慌ててアイスを食べ始めた。

「おいしいんだよ、これ。味見してごらん？」

天音は立ち上がって強引にスプーンを金音の口に押し込んだ。
金音の口に冷たさと甘さがじわりと広がる。

「ふうん、金音はいちじくが好きなのか。美影はそんなことも知ってるんだな。」

まあそれがあいつの仕事だから当たり前なんだが…、なにか面白くないな」

先程からの天音のあまりに子供っぽい表情に、金音は思わずクスリと笑った。

「あ…！笑…った」

天音の動きが止まり、金音もビクリとする。

「いいね。すごくいいよ。安心した。僕にも、いちじく、くれる？」

天音は嬉しそうに言って、口をあんぐり開けて見せる。

金音はそこに自分のいちじくを運び、綺麗な歯がかじるのを、じっと見つめた。

「うん。僕のアイスとよく合うね」

天音はにっこり微笑むと、パクパク残りのアイスを綺麗に食べきり、皿をテーブルに置いた。そしておもむろにベッドに歩み寄ってスプリングに身を投げ出した。

「はーっ。僕もね、緊張してたんだよ」

大きく息を吐いて、胸元のボタンをいくつか外す。

「君はずっと伝説の存在で、憧れはしても手の届かない存在だったからね。」

君のところに時々現れた老人。彼が君をずっと隠していた。

彼は病のせいで老人のように見えたが、僕の前の代の『天音』だ」

「前の代の天音？」

「うん。僕の一族『日神』^{ひかみ}の中で、頂点である『長』になった者は、『天音』を名乗ることになっている。」

先代は若い頃からの病で一ヶ月前に他界した。
その後、準備を始めたから、君を迎えに来るのに今日までかかってしまった。」

一ヶ月前に他界…

金音は最後に会った時の老人の儂げな様子を思い出して、やはりと思った。

「君も同じだよ」

天音の低い声に金音はビクリとする。

「君も同じなんだ。君が属する龍の一族、水神^{みかみ}は、50年に一度、真珠色の肌の娘を産み落とす。

その娘は金音の名を継ぎ、靈感を与える存在として天音に献上さ

れる」

さっきまでのいたずらな表情が消え、天音の顔が暗く曇る。

「ごめん。僕は君を運命から救う男ではない。

その逆で、君を運命に縛り付ける存在なんだ」

天音は自分で口にしながら、とても苦しそうな顔になった。

その様子を見て、金音はいてもたってもいられず、天音のベッドに腰を下ろすと、冷たい手に自分の手を重ねた。

「それでも…天音は私をあゝの屋敷から連れ出してくれた。

全てを知った後にどうするかを自分で決めていいと言ってくれた。

それだけでじゅうぶん、あなたは私の救世主…」

金音のピンク色の唇が、手の甲に触れ、天音はビクリと全身を震わせた。

「ちょっと待って」

そう言って、自由な方の手をかざし、顔をそむける。

「僕自身は運命とかに関係なく、君の存在に惹かれて、

子供の頃に君と会ってから今日まで、ずっとずっと忘れられなかった。

ずっとずっと、求めていた。

だから、あまり君に近付きすぎると、暴走してしまいそうなんだ」

すると金音は更に手を天音の頬へ伸ばし、花のように微笑んだ。

「私も、子供の頃からずっと想ってた」

次の瞬間、天音が鋭敏な獣のように動き、気付くと金音はベッドに仰向けになり、両手を押さえ付けられていた。

「本当に…もう我慢がきかないんだ…！」

もがくように声を漏らしながら、天音の美しい顔が近付き、唇が重なる。

火傷しそうなほど荒れ狂う熱が、金音に襲いかかってきた。

あまりの激しさに息もできず、金音の意識が遠退きそうになる。

すると天音が顔を離して、素早く自分のシャツを脱ぎ捨てる。そして天音のワンピースの肩をはいで、首もとに顔を埋めた。

熱く柔らかい感触に、金音の自由になった唇は声を漏らした。

「なんて声だ…。その声を聞きたびに、君が欲しくて、気が狂いそうになる」

荒い息が肩から胸の方へ降りてくる。

「この香りもだ。君に触れるたびに甘くなって、頭がクラクラしてくる…」

更にワンピースをひきはがし、下着の中を熱い指と唇がまさぐった。

「こんな肌をしている君が悪い」

胸元から見上げてくる天音の瞳が激しく光り、

金音はその金色の輝きに捕らえられ、身動きできなくなった。

ワンピースも下着も何もかも剥ぎ取られ、真珠の肌の全てが露にされる。

天音の美しく引き締まった肢体も、全ての布を滑り落とす。

「金音…」

かすれる声と、ベッドのきしむ音…。

同時に熱い体が覆い被さる。

金音の白い指が、天音の柔らかい髪に触れると、

金色の瞳が更に燃え上がり、唇と唇が再び重ねられた。

今度は金音からも求める。すると二人の間に火花のような感覚が飛び散った。

たまらず天音の口からも声が漏れる。

そしてわずかに汗ばむ真珠の肌を、唇でなぞり始める。

天音の指が、金音の奥へと進み、泉を見付けた。

「ああ…。君も熱くなってる…」

唇も奥へ奥へと進み、泉に到達し、繊細な部分をゆっくりと愛撫した。

すると華奢な体がビクリビクリと脈打った。

「天音… 天音…」

金音は荒い息にあえぎながら、何度も天音の名を呼んだ。

やがてその唇を、天音の唇がふさいだ。

金音は苦しかったが、彼はもう唇を離してはくれず、次の瞬間、熱く燃える天音自身が、金音の体を貫いた。

「ああっ…！」

もうどちらが声を発しているのか分からないくらい、二人は溶け合っていた。

金音は自分の最も深いところに、天音の硬さと熱を感じ、そこから突き上げてくる快感に気を失いそうになる。

天音は金音の中で、生まれて初めて知る恍惚感に、我を忘れていた。

もっと、もっと、深みを求める天音の律動。

やがて世界が弾け跳び、二人は闇の意識へと堕ちていった。

新しい名前

「なんということだ……」

フォースバーグ・エンタープライズのCEO、
ウルフ・フォースバーグは、立ち尽くしていた。

彼はもともと宝石の鉱山で財を成したヨーロッパの富豪の御曹司だった。

後に鉱山を親から引き継いで、それを資金に事業を立ち上げ、
今では世界的企業のトップとして、ニューヨークにオフィスを構えている。

その彼が、とあるきっかけで出会ったのが、日神財団の総帥である
天音だった。

ウルフは天音の才能に惹かれ、何かあるごとに彼を引き込もうとするようになった。

そんな頃、突然、天音がプライベートを理由に姿を消した。
どのルートからもまったく連絡が取れなくなってしまった。

慌てた彼が部下に調べさせたところ、

天音がこの3日間、自宅にこもりきりであることが判明した。

おかしい。もしや病とか……？

そう思った途端、いてもたってもいられなくなり、
チャーター機とヘリコプターを乗り継ぎ、

ハッキング専門の部下にセキュリティを突破させ、
天音の寝室に飛び込んだのだった。

しかし、天音の寝ている筈のベッドで見付けたのは、天使だった。

大きなベッドの乱れた白いシーツの中で、長い睫毛を閉じ、
ピンク色の唇からバラの香りの吐息を漏らす、可憐な天使。

ウルフには北欧の血が流れていたから、髪はプラチナブロンドで肌
も透き通るように白く、

周囲からは金色の狼と称され、無論女性にもよくもてた。

今まで他国のプリンセスから、トップクラスのモデルまで、
数多くの女性と付き合ってきた。

しかし、今日の前にいる天使の少女は、他の女性とは全くの別物だ
った。

「すごい肌だ…」

シーツの下から露になっている白い肩に、思わず手を伸ばした瞬間、
こめかみにガチリと固いものが当たった。

「触るな。命はないぞ」

低く響く声には聞き覚えがあった。

「獅子…。悪い冗談…」

「冗談ではない」

次の瞬間、ものすごい力がウルフの両手を掴み、背中で手錠をかけた。

「おいおい…やり過ぎだ獅子。僕を誰だと思っっているんだ」

「やり過ぎなんかじゃないよ」

冷やかな声にウルフが視線を動かすと、
ガウン姿の天音が腕を組んでこちらを睨みつけていた。

「やり過ぎたのはウルフの方だ。セキュリティを突破するなんて」

そう言つて天音は素早くベッドサイドへ移動し、少女の白い肩をシートで覆った。

「親友の君でなければ、今ここで射殺しているところだ」

天音の本気の声に、ウルフはゴクリと唾を飲み込んだ。

「すまない…自宅に3日ももっていると知って、病気なのかと、心配したんだ」

ウルフの青い瞳が、少女の方へ移動する。

「その少女は…」

「セキュリティが突破されたと知って、僕は真っ先にデスクへ駆け付けた。

そこで君のお抱えハッカーを捕らえることができた。

でもその一方で、まさか君がベッドを目指して来るなんてね。
全く無粋だよ、ウルフ。恋人との大切な時間が台無しじゃないか」

「恋人…」

「そうさ。僕たちはこの三日間、ずっとこのベッドで過ごしていた。
幸いだったのは、その疲れで彼女がぐっすり眠っていたということこ
とだ」

天音は愛しそうに少女の頬に口付けした。

「獅子。金音を彼女の部屋へ運んで」

「かしこまりました」

「コガネ…」

ウルフがその名前を口に出すと、遮るように天音が振り返った。

「ウルフ。ペナルティだよ。カードを一枚差し出してもらおう。

君の優秀なハッカーを僕のものに。そうすればその手錠は外して
あげる」

ウルフはプラチナブロンドの下の綺麗な顔をゆがませて、大きく息
を吐いた。

「分かった…。この状況で君に逆らえる者はいない」

金音が目を覚ますと、美影の顔があった。

「ここは…」

「金音さまのお部屋です」

自分の部屋…。

いつの間にか金音にはナイトドレスが着せられていた。
なんだか天音のベッドにいたことは、夢だったみたい…

「天音は…?」

ベッドから身を起こし不安に震える声で聞くと、美影がわずかに微笑んで答えた。

「来客があつて、今はそのお相手をされています。金音さまもお支度をなさいます」

目が覚めた時、天音にそばにいてほしかった。それなのに…

「天音が私をここに運ばせたのなら、もう私は天音のそばには行かない方がいいのでは?」

金音がそう言うと、美影は少し困った顔をした。

「そういうことではないようですよ」

「なんと云うか：驚いたよ」

ビルの屋上に造られた空中庭園で、ランチ後のコーヒーを口に運びながらウルフが言った。

「だって君は今までどんな女の子が声をかけたって、全く興味を示さなかったじゃないか。」

君とあの少女が二人でいる姿は、なんと云うか綺麗すぎて、宗教画でも見ているようだよ。現実味に欠ける。」

「今の僕たちに現実味なんてあり得ない」

天音は庭園のバラの一つ一つを眺めながら、答えた。

「彼女はこのバラのように、ずっと温室で育てられてきた。外の世界を何も知らない。生まれたての赤子みたいなものだ。」

言いながら、白いバラに唇を寄せる。

「ねえウルフ。僕は君たちがセキュリティを突破する様子を、ベツドの中で見ていたんだ。」

だから君のハッカーよりも早くデスクに行くことが出来たんだよ」

「どついうことだい？」

ウルフが訝しげに眉をひそめる。

「彼女は僕に靈感を与えてくれる存在だ。
僕たちは一族に定められた婚約者同士なんだ」

コーヒーを一口飲んでから、ウルフが再び口を開く。

「靈感というのにも興味はそえられるけど…、つまり愛情はないと？」

天音はクスリと笑ってウルフに向き直った。

「こんな退屈な話はもうやめて、本題に入らない？」

ウルフはスツと顔色を変え、コーヒーカップを皿に置いた。

天音はまだ19歳。しかしその天才的頭脳と神がかり的な勘の良さ、
そしてもともとある財力と人脈から、

各界のトップの間で最も恐ろしい存在と目されている。

彼の前でごまかしはきかない。

「あるルートから、中東の新エネルギー開発の裏で、
日神がかなりの影響力を持っているという情報を得た」

天音はウルフの向かいに座り、給仕を呼んで二人のカップにコーヒ
ーを注がせた。

「そう言えば、シークの一人から、相談受けてたな…」。

ああそうか、ウルフは新エネルギーにかなりの投資をしていたね」

コーヒーに角砂糖一粒とミルクを落とし、銀のスプーンでかき混ぜ
ながら、

天音は言葉を続けた。

「それで、君は僕とどんな取引をしたいの？」

ウルフは声を低くして答えた。

「我が社のIT開発のトップチームを差し上げよう。

その代わり中東諸国が共同で立ち上げようとしている新エネルギー

― 査問機関に

こちらが推薦する学者数人を入れてほしい」

「ふーん…」

青く美しい瞳を見据えながら、天音は一口コーヒーを飲んだ。

するとその手もとで携帯が鳴る。

天音はメッセージを聞くと「連れてきて」とだけ答えて携帯を切り、小さく笑ってウルフを見た。

「僕が席を外していたせいで、彼女がご機嫌斜めだそうだ。

君がちゃんと事情を彼女に説明して、とりなしてくれたら今の話、叶えてもいいよ」

天音が呼んでいると美影に教えられ、金音はビル屋上の空中庭園に
来ていた。

バラとクレマチスが見事に咲く中を、青年の面影を探して歩き回る。

甘い香りで頭がぼんやりしてきた頃、バラのアーチの下で待っている天音を見付けた。

「やあ、来たね」

柔らかい前髪の下で、金色の瞳が静かに微笑む。

金音が近付くと、その手を取って、天音が唇を寄せる。

手の甲に当たる冷たい感触に、金音はビクリとする。

熱い夜を交わした時とは全く違う体温に、

今朝までのことは夢だったのではないかと思えた。

「僕の金音。君に、新しい名前をあげることにしたよ。そして僕もだ。」

「？」

いきなりのもので、金音には話がさっぱり分からなかった。

天音は構わず続けた。

「君も僕も、生まれてきてからずっと天音と金音という名前に縛られてきた。」

でもそれは僕たちが自分で選んだことじゃない。」

冷たく美しい指が、金音の頬に触れる。

「別の人間になって、自分を解放してみよう。」

君は何か一つ、やりたいと思うことを見付けるんだ。

そして僕たちは全く違う人間として、再び出会う」

そこまで言うと、天音は頬を寄せてピンク色の唇に唇を軽く重ねる。

「これはお別れのキスだ」

「天音…」

「この試みが終わる時、美影を君へ差し向けよう。

それまで君は獅子一人を供にして、『金音』の名を隠し
『三上ヒロ』として外の世界を学ぶんだ」

金音の髪に触れ、そこに口付けをすると最後に天音が言った。

「美しい髪だけど…これからの生活のことを考えたら切った方がいい」

そしてそっと手を離し、少しせつなげに微笑んでから、そこを立ち去った。

混乱したままの金音が一人、バラの香りの中に取り残された。

どう歩いたか思い出せなかったが、気付くと金音は自分の部屋の鏡台の前に座っていた。

後ろに立つ美影はまさに金音の栗色の髪にハサミを入れているところだった。

ハラハラと落ちていく自分の髪。

それを現実味なく眺める。

やがて鏡の中の金音は少年のような短髪になった。
しばらくそれを眺めていた金音。

「分からない…」

美影は初めて金音の顔に苦悩の色が浮かぶのを見た。

「分からない！分からない！分からない！」

「金音さま…」

「天音は全てが分かるまで、そばにいろと言っていたのに、私にはまだ何も分からない！」

「金音さま、金音さま」

美影が震える肩に手をかける。

「私にも、天音さまの考えていることは分かりません。
あの方はいつも常人のずっと先を見ておられる」

なだめるように優しい声が言い、そして美影から金音の手にパスポートが渡された。

中を開くと金音の写真の横に『三上ヒロ』のサインが入っていた。

「天音さまも金音さまも、その名前の影響力が大きすぎるために、
外の世界で別名を使うということは、今までもよく行われてきた
ことでした。」

アイスブルーの瞳の青年はヘアブラシで短くなった髪をとかしながら、

鏡越しに言葉を続ける。

「もちろん、金音さまにも選択権がございます。

籠女の頃のように、ここにお留まりになるなら、私はずっとおそばにお仕えいたします」

籠女の頃のように…

金音の脳裏には、幼い頃に見たピーターパンのキラキラ輝く瞳が浮かんでいた。

ずっと憧れていたピーターパン。

天音はあの頃の心をまだ持ち続けているのか、それともすっかり変わってしまったのか…。
熱い体を重ねても、結局は分からなかった。

このままの自分では、何も分からないままだ。

「行きます」

金音の瞳に決意の色が宿った。

「三上ヒロとして、外の世界へ」

そうして立ち上がり、今までのワンピースを脱いで、少年のような軽装に着替えた。

するとタイミングを見計らったように、ドアを叩く音が響いた。

「失礼します」

獅子の声。

ドアが開くと獅子の後ろから、プラチナブロンドの髪の背の高い男性が現れた。

ターコイズブルーの瞳と形の良い口元にニツコリと笑みを浮かべ、男性はうやうやしく一礼した。

「初めまして、ヒロ。私は天音の友人でウルフ・フォースバーグ。彼から水先案内人を頼まりました。」

ウルフは金音に歩み寄り、慣れた仕草で手の甲に口付けをした。

「君の事情は天音から聞いている。名前を変え、別の人間として外の世界へと行くということだけど、最初の一步だけは事情を知る者が案内をした方がいいだろう。いかがかな？」

言いながら青い瞳が情熱的に輝き、金音を捕らえる。

少し危険な感じもするけれど、優雅な動きと紳士的な振る舞いは、信用できるような気がした。

「わかりました。よろしくミスター・フォースバーグ」

金音の答えに、ウルフは満足そうに頷いた。

彗星

広大な砂漠の中、宝石のように青く輝く美しい国。

その中央にそびえ立つ金色のパレスの奥で、紫水晶の占い玉が怪しい光を放っていた。

「やはり…シャヒール様のもとへ星が近付いてきております」

緋色のマントで全身を包み、年老いた鼻先だけを覗かせる老人。ジャラリと音をたてて天幕をくぐり、背の高い男が歩み寄る。

「アズール。お前の占いは確かによく当たる。

しかし俺個人のことは占うなど、何度も言った筈だ」

金の刺繍の入った豪華なローブをまとった、褐色の肌の若者。漆黒の長い髪を揺らし、黒曜石の瞳を威圧的に光らせる姿は、まさに美しき青年王そのものだった。

「輝きが大きすぎるのです」

老人は紫水晶を凝視しながら、しわがれた声で続けた。

「あなた様の星、そして近付いてくる彗星。

二つは交わり、凍っていたあなた様の星を炎に変え、また離れて行きます。

シャヒールさまの人生を変える出会いが、近々訪れる」

「ふん。たいそうなことを言ってくれるじゃないか」

シャヒールはバカにするように鼻先で笑い、手に持っていた盃を口に運んだ。

「それでその彗星とはどんな敵だ？」

「敵ではございません」

答えると、アズールは砕いた香木を香炉にパラパラ振りかける。火花が散り、そこから甘い香りの煙が立ち上る。

「女です。真珠色の肌を持つ少女。」

北の王に連れられて、間もなく我が国の門をぐぐります。」

「少女だと？」

シャヒールは瞳をキラリと光らせた後、口元をゆがませて低い笑い声を響かせた。

「面白いじゃないか。たかが女一人に俺の運命が動かされるといいのか。」

褐色の肌の青年王は盃を飲み干し、ニヤリと笑う。

「退屈が紛れてちょうどいい。その時を楽しみに待つとしよう。」

主を失った部屋。

まるで何事も無かったかのように、家具全てを元の位置に戻し、薔薇色のカーテンを閉じる。

全てを終えたアイスブルーの瞳の青年は、部屋を出て扉を閉じ、大きなため息を吐き出した。

今まで決して感情を表に現さなかった彼にはめずらしいことだった。

「金音を行かせたことを、恨んでいるか」

銀色の髪が流れる背中に、天音の声が届く。

少し間を置いて、美影が天音の方へ振り返った。

「あなたは恐れているんですね」

美影の静かな盲目の瞳を、天音は見つめ返した。

「そうだ。僕は恐ろしい。」

僕だけしか頼る相手を知らず、捨てられた仔犬のように身を寄せてくる彼女に、

どうしようもなく溺れていく自分が…」

話す天音の声が、苦しそうにかすれてくるのを、美影は無表情のまま聞いていた。

「誰の目にも触れないように隠して、真綿でくるむように守ってや

りたい。

自分だけのものにして、いつまでも閉じ込めておきたい。
でもそれでは、今までと変わらない。あの屋敷から連れ出した意味がないんだ」

天音は壁に拳を押しつけて、グツと力を込めた。

「だから…逃げたんだ。僕は彼女から」

「そうですね。まるで手負いの犬のような逃げ方でした。」

銀髪の青年の口から、思いがけず辛辣な言葉を投げつけられ、天音は目を見張った。

次の瞬間、眉一つ動かさない美影の背後に、暗い感情が立ち上るのを感じた。

「ろくな説明もせず、あなただけが安全圏へ逃げ込んだ。
残された彼女はあなたに失望されたと思い込んで、とても傷付いている。」

美影は金音の部屋に力チャリと鍵をかけた。

「せめてもう一度会って、早めに彼女を安心させた方がいい。
そうでなければ、あなたは必ず後悔することになる。」

冷ややかにそう言う美影の言葉を、天音は息を飲んで聞いていた。

「さて、どうしたものか…」

プラチナブロンドの美しい男が、自家用ジェットの中の自分のデスクに座り、
書類をぼんやり眺めながら呟いた。

そして長い足を組み、きれいな指を顎に当てて大きくため息をつく。

「天音から彼女を託されたものの、どう扱っていいか分からん」

すると秘書のジョバンニが血相を変えてやってきた。

「ウ、ウルフさま！なんですかあの少女は…」

ジョバンニは黒髪にブルーアイのイタリア系美丈夫で、
ウルフに肩を並べるプレイボーイ。

めったなことではその甘いマスクを崩さない。

しかし今は本人もそんなことは忘れてきっているようだ。

「少年のような姿をしているから、油断して声をかけたら、
すごい美少女じゃないですか。」

僕に少女趣味なんてなかった筈なのに、近付いた途端、ゾクツと
きた」

ウルフはシートの中で眠る天使の姿を思い起こした。
窓からの日差しに照らし出された彼女はあまりに美しく、

思わずそのシーツを引き剥がして全てを確かめたい衝動に駆られた。その後、再会した時にはまるで少年のような短髪になっていたが、その細い首筋にそそられて、ウルフは再びゾクリとしたのを覚えている。

「彼女は日神天音の婚約者だ。」

内心でその事実を確認しながら、ジヨバンニに向かってそう言った。

「日神…。あの日本のお綺麗な青年…」

「そうだ。行方をくらましていたこの3日間、

あの娘と部屋にこもってベッドを温めていたそうだ。

そこへ無粋な私が邪魔しに入ったという訳さ。」

「ヒュ、見かけによらずやりますね、あの坊や。

それで途端にあの娘をポイですか」

イタリアの伊達男の言葉に、ウルフは苦笑いをする。

「それが分からないから、頭を抱えているんだ。

必要ないと思っっている相手に、一番気に入っている護衛をつけたりはしないだろう。」

「ああ、あの大きな男…」

ジヨバンニはヒロの横で影のように押し黙り、

感情のない瞳を自分に向けていた男を思い出していた。

あれは確かにプロの佇まいだ。それも最上級クラスの。

ジヨバンニの心中を読み取ったウルフは頷いて、話を続けた。

「天音はずっと温室で育ってきた彼女に新しい名前を与え、日神とは関係ない環境で、外の世界を経験させたいということのようだ。

そのお目付け役として私に白羽の矢が立ったという訳だ。」

「そんな子守り紛いのことを、北の狼王とも称されるウルフさまにやらせよう？」

ジヨバンニは訝しむように、形の良い眉を寄せた。

「仕方ないよ。その交換条件が、
中東で今まさに立ち上げられようとしている新エネルギー査問機
関の人事なのだからな」

ジヨバンニは驚きで表情を堅くした。

「あの坊やに中東とのパイプが？」

ウルフはデスクの引き出しから金の刺繍の施されたカードを取り出すと、

ジヨバンニに見せた。

「今、我々が向かっている中東の小国『ラマット』で、
明日開かれる国王主宰の晩餐会の招待状だ。

小さな国だが現国王はキレ者で有名ということは君も知っている

だろう。

早くから新エネルギーの導入に着手し、
今や世界のエネルギー問題の中心的存在となっている。

誰もが欲しがるとその国王直々の招待状を、
天音はいとも簡単に差し出してきたんだ。
まったく、恐ろしい青年だよ。」

ジヨバンニは美しい招待状を見下ろしながら、ゴクリと唾を飲んだ。

「新エネルギー査問機関の人事と、今をときめくラマツト国王主宰
の晩餐会。

それが代償と聞いて、これを断れる者がこの世界にいるか？

裏を返せば、彼女には金では買えないほどの価値があるということ
になる。」

ウルフは言いながら、デスク脇のモニターへ視線を移す。

操縦席や機外の様子を映し出す複数の画面を流し見た後、
ヒロと獅子のシートを映している画面に視線を留めた。

「天音はその影響力の強さを隠すために、よく偽名を使って渡り歩
いている。

それは彼のような立場だから理解できることが、彼女の場合は…、
わざわざ偽名を使う理由が不明だ。」

「ミカミ・ヒロというのは偽名なんですね。では本名は？」

「一瞬だけ『コガネ』と聞こえた」

「『コガネ』ですか。では少し調べてみましょうか」

「そうだな。頼むよ」

『三上ヒロ』という新しい名前を与えられた少女は、自分と護衛の獅子と、案内人のブロンドの男性の他、わずか数人のみが乗るジェット機の中で、今までのことを思い返していた。

私をずっと閉じ込めてきた屋敷から、連れ出してくれた天音。

見覚えのある彼の面影と、冷たい唇と、体を重ねた時のあの熱に、運命を感じて、彼に身を任せてもいいと、本気で思っていたのに…

まるで私を引き剥がそうとするかのように、天音は私をウルフに引き渡した。

きつと、あまりに何も知らない私に興醒めしたんだ。
頼るだけの私に嫌気がさしたんだ。

そう考えると、石を詰め込んだように胸が重苦しくなってくる。

「ヒロ、獅子、食事の準備が出来たのでこちらへどうぞ」

ウルフの秘書のジョバンニが、二人を呼びに来た。
上手く反応できずにいる彼女を、武骨な獅子がうやうやしく案内する。

その様子を見てジョバンニが小さく笑い、するりとヒロの手を取って席へと導いた。

「あなたの席はこちらですよ。さあどうぞ」

触れた手から花のような甘い香りがして、ジョバンニはうつとりする。

抱き締めたら、どんなに甘くなるんだろう…

ジョバンニの妄想に気付いたのか、

獅子が僅かに苛立たしさを滲ませた眼で彼を睨んだ。

「おっと失礼。君は彼女のお隣へどうぞ」

獅子の迫力にジョバンニは慌てて身を引いた。

「やあ、集まったね」

そこへ白いシャツに黒革のスラックスというラフな服装のウルフが現れた。

4人が向い合わせのシートに座ると、それぞれのテーブルに素早く食事が運ばれてきた。

「さて、空の旅は短いからね。早速、今後の作戦会議といこうか」

食後のコーヒーが出される頃、その香りを吸い込みながら、ウルフ

が切り出した。

「どうしたいか、なんていきなり聞かれても、ヒロは困るだろう。だからまずは私と行動を共にしながら、ゆっくり考えたらいい。とは言え、さすがに仕事場にまでは連れて行くことはできないが。」

コーヒーを一口飲んでから、言葉を続ける。

「ちょうどこれから1週間ほど、ラマツトという小国に滞在する予定だから、

観光でもしながらこれからのことを考えるというのはどうかな？
ラマツトは豊かで治安も良い先進国だ。きっと楽しめる。」

ウルフの優しい言葉に、ヒロは素直に感謝した。

「ありがとうございます、ミスター・フォースバーグ。
自分の身の振り方は出来るだけ早く決めます。」

「急ぐ必要はないよ。悩みがあつたらいつでも相談してほしい。」

アメジストブルーの瞳に甘い光を宿して、ウルフは微笑んだ。
今のヒロには彼の包容力ある態度が、心からありがたかった。

でもいつまでも甘えていてはダメだ。
そう自分に言い聞かせた。

「ところでラマツトに着くとすぐに晩餐会があるのだが、
君には私のパートナーを勤めてもらおうと考えている。どうかな？」

ヒロは驚いて、大きく頭を横に振った。

「晩餐会なんて私にはまだ無理です!」

「そんなに身構えることはない。

着る物は僕の方で揃えるし、君は横でただ笑っていてくれるだけでいいんだ」

「ミスター・フォースバーグ」

それまでずっと黙っていた獅子が突然遮ったので、誰もが驚いた。

「それはいささか早急すぎるかと。」

その場が沈黙に包まれる。

やがてジョバンニがひきつりながら言葉を発した。

「確かにウルフのパートナーとしていきなり姿を現すのは、悪目立ち過ぎますね。

とりあえず今回の滞在の間は、目立たないよう使用人の中に紛れていた方が、

今後のことを考えるためにもよろしいかと思います。」

ウルフはそれまでの笑みを消し、少し機嫌を損ねた様子で視線を宙に泳がせた。

内心、ドレス姿のヒロの手を引くことを想像し、名案だと思っていたからだった。

しかし獅子やジョバンニの言うことが正しいということもよく理解していた。

今まで、暴君ではなく理性派を振りかざしてきたことを後悔しながら、

視線をテーブルへ戻した。

「君たちの言う通りだ。

ジョバンニ、ニューヨークから呼び寄せている女中頭に、話を通しておいてくれ。」

「承知いたしました」

ヒロはそれを聞いて胸を撫で下ろした。

とにかくラマットに滞在する1週間の間に、次の身の振り方を考えよう。

ジェット機はラマットまであと1時間半のところまで来ていた。

金のピアス

ラネット国の首都ズーク。

月の光を反射し、魔宮のようにきらめく金色のパレス。それを遠く眺める暗い路地裏に、一台の高級車が停まった。

スーツの男が後部座席のドアを開くと、

中から黒いマントで全身を包んだ人物が降りてくる。

一瞬、裾から艶かしい女の脚と、黒いハイヒールが覗いて、消えた。

マントの女は地下へ続く石段を降り、突き当たりの古びた木戸を開く。

その向こうには甘い煙が充満する薄暗い部屋があった。

客たちのざわめきに混じって、気だるいピアノの音色が耳に届く。

マントの女は赤い唇をペロリと舐めると、

人混みを掻き分けて店の奥へ入っていった。

店の一番奥に置かれたグランドピアノには、若い青年が座っていた。まるで伝説の美神のごとき繊細な顔立ちに、黒い前髪がサラリと揺れている。

切れ長の瞳は金色で、長い睫毛が甘く影を落としている。

気品あるしなやかな肢体と、鍵盤をなぞる美しい指に、

女も男もため息をついた。

先ほどのマントの女が、曲の途中で現れ、ピアノに一番近い特等席に座る。

フードの下で、赤い唇を再び舐める。

ピアノの青年は曲を弾き終わると、拍手の中を立ち上がり、マントの女に歩み寄った。

その長い指がフードの下の紐に触れ、マントがハラリと滑り落ちる。

そこに褐色の肌と黒い巻き毛の妖艶な美女が現れた。

その女は青年のために選んだ挑発的な薄絹の黒いドレスを、ここぞとばかりに見せ付けた。

長い指を柔らかい胸元へ滑り込ませながら、青年は顔を落とし、赤い唇に唇を重ねる。

媚薬のような甘い口付けに、女は呻き声を上げた。

「ああ…なんて素敵なの…」

10分後、二人は女の車の中にいた。

女はむさぼるように青年の冷たい唇を求める。

青年は長い指をドレスのスリットの間に差し込み、太股をなで回す。

やがて涌き出し腿を伝い落ちる甘い蜜。

その奥へ奥へと指先を進め、青年は熱い果実の中をかき混ぜるように愛撫した。

もう一方の手が、ビクリビクリと体を震わせる女の胸元のレースを剥ぎ取り、

むき出しになった蕾をもてあそぶ。

走る車の窓から時折、青いネオンが差し込み、
上気する肌と乱れる巻き毛を暗闇に浮かび上がらせる。

赤い爪の下で固くなった青年の一部は、蜜の流れを遡り、
やがて熱い果実の中へ入り込んだ。

「テル！テル…！愛してる…」

女が叫び声を上げると、青年のしなやかな体から汗が火花のように
飛び散った。

気だるい午後。緩い風がカーテンを静かに揺り動かしている。

女は黒いシーツの中、隣で眠る青年の髪に指を絡めて、
愛しそくに横顔を眺めていた。

やがてそれに飽きると、シーツの中に潜り込み、
青年のそれを口に含んだ。

舌先で愛撫するうちに熱くなってきた青年が、
綺麗な口元から湿った息を洩らす。

その艶やかな声にたまらなくなり、
女は跳ね起きて青年にまたがると、自分の中へ押し込んだ。

女が身をよじる度に、美しい体を反り返らせる青年。

それを見下ろしていると、例えようのない快感が全身を駆け巡る。

そして上り詰めた後、荒い息をしながら青年が

ゆっくりと金色の瞳をこちらへ向けてくる瞬間が、

女はどうしようもなく好きだった。

「まったく、悪い坊やね」

「悪いのはあなたでしょ」

青年はかすれた声でそう言った。

女は彼の『テル』という名前しか知らなかった。

何カ国語も操るので、国籍も不明だ。

ただ、持っている携帯が日本製だったので、

もしかしたら日本人かもしれないと思っている。

しかし東洋人は黒髪に黒い瞳であるはず。

それに反して彼の瞳は金色だから、きっと混血なのだろう。

東洋人らしからぬ彫りの深さはきつとそこからくるのだ、と一人納得していた。

初めて彼を見かけたのは2年前、昨日のあの店だった。

アドニスのごとき美青年がピアノを弾いているという噂を聞いて興味を持ち、

見に行つたのだ。

そして彼の気品すら感じる佇まいに、一瞬で夢中になった。

思わず演奏後にその手を取ると、

初対面だったが彼は誘いに答え、店の奥のトイレになだれ込み、体を重ねた。

それ以来、会えば必ず体をむさぼり合うようになった。

しかしいつも数日後には青年が姿を消すのだ。

女はその度に追いかけてくなる気持ちを押さえていた。

本当は彼がどこへ消えて行くのか、知りたかった。

でも青年は女の素性を聞かず、自分のことも語らない。

それなのに追求したり調べたりするのは、

彼の機嫌を損ねそうでは出来なかった。

青年は明らかに女よりも10歳は年下だったから、

その彼に追いつがることはプライドが許さなかった。

加えて彼女には、王族であるというプライドもあった。

50歳年上の夫は国の宰相まで上り詰めた男だったが、

10年前に引退し、その後はすっかり無気力になってしまい、

今は寝たきりの生活を送っている。もはや妻の顔すら判別できない。

だから若い彼女がどんな男と付き合いおうと、文句を言う者はいなかった。

むしろ政略結婚をさせられた国一番の美姫に対する同情の声の方が大きかった。

そのような素性であったから、青年のことを調べようと思えばいつでも調べられた。

しかし彼女にとっては、そんなことよりも彼との幸せな時間を壊さないことの方が、遥かに重要だった。

今回はいつまでここにいられるの？と聞きそうになったが、とっさに質問を変えた。

「ねえ、今度私の島へ旅行に行きましょうよ」

テルは前髪をかきあげて微笑んだ。

「あなたが行きたいのであれば、どこへでも」

王子のように優雅に答える彼の耳の金色のピアスに、女は口唇を寄せる。

「そうだ…。僕からもあなたにお願い事があったんだ。」

青年から初めてそんなことを言われ、女は胸をドキリときめかせた。

それを上目使いで見つめながら、彼は甘く囁いた。

「叶えてくれる？」

ズークの街に宵闇が近付いてきていた。

ポツリポツリと点き始めた街頭の下を、黒塗りの高級車が何台も通り抜ける。

それらは王宮の門に次々と吸い込まれていく。

国王主催の晩餐会が開かれようとしていた。

純白のロールスロイスが玄関に横付けされ、

そこからプラチナブロンドの背の高い男が姿を現した。

優雅な動きと気品あふれる顔立ち。黒く艶やかな夜会服に身を包み、ターコイズブルーの瞳を宝石のように輝かせている。

彼の圧倒的な美しさに、その場にいた全ての者が息を飲んだ。

「あれは北の狼王、ウルフ・フォースバーグだ……」

誰かが小さく囁いた。

ウルフが後部座席へ手を伸ばすと、それにつかまって金髪の女性が姿を現した。

目の覚めるような美人だった。

彼女はその若さと美しさで今、ヨーロッパ社交界一の人気を誇る、フランスの伯爵令嬢だった。

妖精のような緑色の瞳を、うっとりとうルフへ投げ掛けてくる。

その視線の先で、ウルフは内心、ここにいるのがヒロだったらと、想像を巡らせていた。

あの小鹿のように華奢で美しい少女に、ドレスを着せてみたかった…

そんな思いをかき消すように、少し瞳を閉じてから、

伯爵令嬢の手を優しく引き、自分の腕にかけた。

さて、仕事を始めよう。

王宮の中へ姿を消すウルフの後ろ姿を見送ってから、白いロールスロイスは玄関を離れた。

やがて門までの道の中腹まで来ると、それはゆるゆる動きを止めた。

助手席から黒髪の男が降りてきて、

ボンネットを開け、さも車の調子が悪いといった様子で、中を覗き込んだ。

そして左手を背中に回し、小さく合図する。

すると二つの影が車からするりと抜け出し、夜の闇の中に溶け込んでいった。

晩餐会には天音も出席するかもしれない。

そのことを獅子の口から聞いた時、ヒロはいてもたってもいられなくなつた。

彼女の心中には、彼に聞きたいことが山程あつたからだ。

次に会つたら必ず聞こう。

強い思いで獅子にそれを相談したところ、彼はあつさりと賛同してくれた。

しかしあくまでも隠密に、というのが彼の出した条件だった。

ヒロは男物のダボダボなズボンを履き、ポンチョを被つて完全に体型を隠した。

夕闇の中であれば少年にしか見えなかった。

獅子は宮廷の下男の服と寸分変わらないものを用意して、身に付けた。

「これならば、万が一見付かつて、下働きの者と思われるでしょう。

それからヒロは話しかけられても、決して声を出してはいけません。あなたは少女であることを見破られないように、細心の注意を払ってください」

獅子の低い声に、ヒロは黙って頷いた。

今夜の宮殿はいつにも増して華やかな輝きを放っている。

ヒロと獅子は走り去る車の音を背後に聞きながら、庭園の茂みの方へと進んで行った。

ウルフの内ポケットで携帯が小さく鳴り、手に取ると無事に二人が宮中に入ったという連絡が届いた。

ひとまずは成功か。

天音を見付けたら、それとなくこのことを伝えよう。

するとその時、背後に気配を感じて振り返った。

そこには褐色の肌に長い漆黒の髪をたゆたわせ、黒曜石の瞳で鋭くこちらを睨む尊大な男が対峙していた。

「国王陛下……」

ウルフは伯爵令嬢と並んで、豪華なローブ姿の王に、うやうやしく挨拶をした。

「ウルフ・フォースバーグ、よく来てくれた。そちらのレディもお美しい。」

まるで絵画から抜け出てきたような二人だ。皆の目の保養になっているようだ。」

その語気から国王の豪傑さが滲み出ていた。

「日神天音からの紹介だったな。今まで君のような重要人物を失念していたとは、大変な落ち度だった。」

失礼を許してほしい。」

どうやら国王はウルフに好印象を持ってくれているらしい。それが天音の口添えのおかげだとしたら、礼を上乗せしなくてはならない。

「国王陛下は天音と親しいのですか？」

ウルフが思わず尋ねると、国王はニタリといたずらっぽく笑った。

「チャット仲間だ。親しいが、まだ顔を見たことはない。」

だから今宵、会えることを楽しみにしていたのだが、先ほど欠席の連絡があったよ。

まったく残念だ」

天音は欠席か…

ウルフは内心で大きくため息をついた。

そして国王との話が終わったら、急いで連絡を入れてやらなくてはと考えていた。

ふと、落胆するヒロの顔を思い浮かべて、胸が痛くなる。

「ウルフ、早速だが明日のランチの予定は決まっているか？
良ければ是非、城に来て欲しいのだが」

ウルフの懸念は国王の言葉にかき消された。

「はい。喜んで」

「私の兄弟姉妹がちょうど集まっているから、その時にゆっくり紹介しよう。」

実は妹たちに君の話をしたら、紹介しろとせつつかれたのだ。

ああ、噂をすれば我がいとこ殿がすぐそばにいないか。シルヴァーナ！」

国王の呼び声に反応して、褐色の肌に黒い巻き毛をまとった妖艶な美女がこちらへ歩み寄ってきた。

…と、次の瞬間、その隣に立っている青年を見て、ウルフは驚愕した。

天音じゃないか！

しかし、彼の耳には金色のピアスが光っていた。それは彼が偽名を名乗って別人としている『しるし』。

つまり決して天音と呼んではならない。明かしてはならないのだ。

「ウルフ、これは私のいとこのシルヴァーナだ。」

「初めまして、ミスター・フォースバーグ。お噂はかねがね。お会いできて光荣ですわ。」

国王と同じ漆黒の瞳が艶っぽく微笑み、ウルフの姿を舐めるように見る。

その横で天音は穏やかな微笑を浮かべていた。

国王が金色の瞳の青年に気付いて、遠慮ない視線を注いだ。

「随分、美しい恋人を連れているな。」

「ふふふ。身分を隠した王子様よ」

シルヴァーナは上機嫌でそう言うと、天音の腕に絡み付き、美しい体を擦り寄せた。

「ふん、まあ好きにしろ。ウルフ、向こうで大臣たちを紹介するぞ。」

そう言って、国王は二人に背を向けた。

ウルフはそれを追いかけながら、ひどく困惑していた。
この事態を一体、どう伝えればいいのか…

月下

雲に切れ間ができ、月明かりがこぼれる。
それに気付いてヒロが空を見上げた。

青白く照らし出されたその横顔の美しさに、
獅子は密かに見とれていた。

二人は晩餐会の音楽が漏れる窓の下に来ていた。

いつも通りヒロの影のようにぴたりと背後に立って、
獅子は少し先を指差した。

「バルコニーがあります。
あそこなら、カーテンの影に入って、中を覗くことができるでし
よう」

ヒロは黙ったまま、頷いた。

「私は中に入って、探してみます」

え？と聞き返すと、獅子は持っていた布袋の口を開いて中を見せた。
それはシルクの夜会服のようだった。

「あなたは私が戻るまで、バルコニーにいて下さい。必ず戻ります」
そう言うと、獅子は茂みに姿を隠し、素早く着替えてから、また姿
を現した。
背が高く野性的な彼の夜会服姿は、実に精悍で美しかった。

ヒロが見とれる目の前で、身軽にバルコニーの手すりを飛び越える
と、

さつと衣服のほこりを払う。

そして最初からそこにいたかのような自然な素振りです、人混みの中
へ入っていった。

雲の切れ間は広がり、月明かりと影のコントラストが先程よりはつ
きりしてきた。

ヒロも影のかかる場所を見付けて、そこからよいしょと手すりによ
じ上る。

そして必死に気配を消して、カーテンの影に体を滑り込ませた。

考えてみれば、こんなところで隠れているだけでは、

天音を見付けることなんて出来っこない。

中に入っている獅子やウルフからの報告を大人しく待つ方が効率的
だ。

それでもやはり、はやる心が押さえきれず、

視線は晩餐会の人混みの中に天音の姿を探してしまう。

何の成果もなく、連絡もないまま、時が流れる。

じわりと襲ってくる疲労感に、しゃがみこみそうになった頃、
人が近付いてくる気配がして、ヒロは固まった。

シャンパンを手にした男女が、クスクス笑いながらバルコニーに姿
を現した。

手すりにグラスを置いて、体を絡ませあい、唇を重ねる。

ヒロは今すぐ逃げ出したかったが、
そんなことをしたら見付かるのは間違いなかったので、動けなかった。

男の手がドレスの上をはい回り、女が歓喜のため息を洩らす。

いたたまれなくなり、ヒロは両耳をふさいだ。

やがて女がシャンパンを飲み干してから身をかがめて、男の腰に顔を近付ける。

ビクリビクリと男の体が揺れる。

その顔をのけぞらせた瞬間、雲が動いて光がこぼれ落ちてきた。

照らし出されたのは、美しい青年の顔。

こめかみから飛び散る汗が、月光を反射してキラキラ輝き、形の良
い顎を縁取った。

ヒロは悲鳴をあげそうになる口を押さえて、必死にこらえた。

それは間違いなく天音の顔だった。

膝が小刻みに震えだす。

雲の動きと共に、月光の帯が横に広がる。

自分に差し掛かろうとするそれを、ヒロは必死で避けようとする。

ふと、天音の視線が動き、ヒロの姿を捕らえてピタリと止まった。

次の瞬間、天音は女を引き寄せ、手すりの上に乗せると、
激しく自分の体を押し付けた。

女は突き上げられるたびに小さく叫び、
何度目かでガクリと力尽きて青年の胸にもたれかかった。

静まり返るバルコニーで、天音は息を整えてから女を抱き上げた。

そして一瞬だけヒロの方へ視線を移したが、
何も言わずに闇の中へ消えていった。

今のは何だったのだろう…

ヒロはグラクラする頭に両手を当て、なんとか冷静に考えようとした。

しかしまったく上手くいかず、頭はただ混乱するだけだった。

いつの間にかフラフラと足が動きだし、
気付くとバルコニーを降りて、茂みの中をあてもなく歩いていた。

獅子にバルコニーで待つように言われたことは覚えていた。
でも今は会いたくなかった。獅子にも、ウルフにも。

会って、どう説明すればいいのか、分からなかった。

「誰だ？」

茂みの向こうから、知らない声に呼び止められて、ヒロはビクッと立ち止まった。

見付かった…

しかし頭が真っ白になっていて、どうすべきか考えることが出来なかった。

その場に立ち尽くしていると、ガサガサと茂みをかき分けて声の主が近付いてきた。
姿を現したのは、長い漆黒の髪に縁取られた褐色の肌の大きな男だった。

金の飾りのついた豪華なローブを見にまどっていたから、もしかして王族の人ではないかと、ヒロはぼんやり思った。

「庭番の少年か？」

ヒロは黙っていた。

薄暗がりの中で、男は目を細めて少年の顔を見た。
月光を受けて、肌が真珠のように輝いている。

「お前、綺麗な顔をしているな」

思わず手を伸ばしかけると、少年は一步後ずさった。

「ああ、逃げるな逃げるな。何もしない。

…そうだ、うまい酒を持ってきたいるんだ。付き合わないか？
お前はまだ子供だが、今日は私が特別に許してやろう。」

そう言つて、くるりと背を向け歩き出す。

ヒロはなんとなく、この人物を無視することが出来なくて、ついに行くことにした。

やがて噴水の広場に出ると、男は腰にぶら下げていた袋から酒瓶と盃を取りだし、

石のテーブルに手早く並べた。

盃に赤い液体を注いで、ヒロの方へ突き出す。

「まあ、飲め」

素直にそのまま口へ運ぶと、甘い香りと共に液体が流れ込んできて、喉がじんわり温かくなつた。

男も自分の盃に酒を注ぎ、それを一気に喉へ流し込む。

「うん。やはりうまいな。」

満足そうに頷き、ヒロと自分の盃に酒をつぎ足して、まあ座れと言う。

二人は石のベンチに並んで腰かけた。

「本当は晩餐会など疲れるだけで、好きではないんだ。

特に妃の地位を欲しがる女たちが、うるさくてたまらん。」

酒で饒舌になつたのか、男は一人でまくし立てた。

「占い師は近々、私の運命を変える女が現れると言つが、美しい女など、もうたくさんだ！」

美しい女…

その言葉を聞いて、ヒロの脳裏に女を抱き上げる天音の姿が浮かんだ。

途端に胸が苦しくなり、思いがけず一筋の涙が頬を流れた。

「泣いているのか？お前も何か嫌なことがあったのか？」

男は少年の涙に気付き、慌てて手を肩に回した。

その肩が、思っていた以上に細かったので、ドキリとする。

ふわりと甘い香りが漂い、どこかで花が咲いているのか、と心の中で呟いた。

ヒロは盃を握り締め、残っていた酒をグイッと飲み干した。そして肩を小さく震わせた。

男はそれを見下ろしながら、抱き締めたい衝動に駆られていた。

バカな。相手は少年だぞ。

いや、これが父性愛というものかもしれない。

もっともらしい理由を見付け、その手に力を込めようとした時、城の方から声が聞こえてきた。

「ヒロ！」

足早に近付いてくる夜会服の若い男が二人。

ウルフと獅子だった。

「国王陛下、その者は私の元で下働きをしている少年です。使いを頼んであったのですが、城の中で迷子になったようで、申し訳ない」

ウルフは荒い息でそう説明した。

「いや、いいんだ。別に迷惑などしていない。たまたま見かけたので、酒の相手をしてもらっていただけだ」

「酒…？」

視線をヒロの方へ移すと、青ざめた顔に涙が輝いていた。

ヒロ、まさか天音に会ったのか？

ウルフは息を飲む。

それに気付いて国王が口を開いた。

「酒を飲んだ途端、ああなのだ。何か嫌なことがあったのかもしれない」

ウルフと獅子は無言で顔を見合わせた。

「ウルフ、どうだろう。明日のランチにこの少年も連れて来ないか？」

国王の申し出に、ウルフと獅子はぎょっとした。

「いえ…！この者は体が弱くて口がきけない上に、日の光を浴びることができないのです。下働きの身分でもありますし、昼食を一緒にするのはとても無理かと…」

咄嗟にウルフは嘘をついた。

この男にヒロが女であることを明かすのは、危険なことだと思ったからだった。

国王は少し考えてから、再び口を開いた。

「では明日の夕刻はどうだろうか。

明るい場所が苦手ならば、またこの庭でもいい。

その代わり、二人きりでだ。私はこの少年と話がしてみたい。」

ウルフは国王の言葉に啞然とした。

そこまで言われては、断ることはできない。

「分かりました。でも今夜はこれで、連れ帰ります。ヒロ、行こう」

ウルフに呼ばれてヒロがゆらりと立ち上がる。

次の瞬間、体の力が抜けて、その場に崩れ落ちる。

ウルフの背後で影のように立っていた青年が、獣のような素早さで腕を伸ばし、

地面に激突する直前で抱き止めた。

そしてそのまま両腕にヒロを抱き上げると、一礼をして国王に背を向けた。

国王は立ち尽くし、ウルフと獅子の姿が見えなくなるまで見送った。

一人になると右手で自分の胸を掴み、くぐもった声を絞り出した。

「なんだ？この感情は…」

眉間に深い皺を刻み、ギリツと歯をかみしめて、

国王は激しく暗闇を睨みつけた。

お知らせ

連載途中ではありますが、ストーリーの内容を鑑み
この作品はムーンライトノベルの方へ移行したいと思います。

こちらは8月一杯で削除し

設定や文体などを改めて、一から執筆し直す予定です。

お気に入り登録して下さっていた皆様
勝手を言って、申し訳ありません。

改訂後は、登場人物の名前も変わる可能性があります
主人公の「金音」という名前だけは変わりませんので
どうぞ見つけてやってください。

これまで読んで頂き、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3490v/>

金音《こがね》

2011年8月21日21時57分発行